大阪商業大学学術情報リポジトリ

夏目漱石『夢十夜』「第六夜」から村上春樹「ドライブ・マイ・カー」、そして朝井リョウ『何者』へ
―2022年度前期総合教養F「映画になった小説」全4回の取り組み―

メタデータ	言語: ja
	出版者: 大阪商業大学商経学会
	公開日: 2023-03-28
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 増田, 正子, MASUDA, Masako
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://ouc.repo.nii.ac.jp/records/1665

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

夏目漱石『夢十夜』「第六夜」から
村上春樹「ドライブ・マイ・カー」、
そして朝井リョウ『何者』へ

―2022年度前期総合教養Ｆ「映画になった小説」全４回の取り組み―

増　田　正　子

1、はじめに
2、小説『夢十夜』「第六夜」（夏目漱石）と映画『ユメ十夜』「第六夜」（監督　松尾スズキ）
3、小説「ドライブ・マイ・カー」（村上春樹）と映画『ドライブ・マイ・カー』（監督　濱口竜介）
4、小説『何者』（浅井リョウ）と映画『何者』（監督　三浦大輔）
5、小説と映画の比較
6、講義の振り返りと今後の課題
7、おわりに

１、はじめに

2022年度前期の総合教養Ｆでの取り組み「映画になった小説」（第11回～第14回）の実践報告をおこなう。

総合教養Ｆの授業目標は「文学・評論を読むことで日本文化への理解を深めるとともに、様々なジャンル（俳句・短歌・詩・小説・評論等）の学習を通して文章を理解する力、表現する力を養う。（以下略）」である。その目標に従って、俳句・短歌・詩・小説・評論・映画になった小説と様々なジャンルについて、基本的な事項及び創作や鑑賞、また分析方法の解説をおこなっている。

まず「映画になった小説」全４回を講義に取り入れた経緯と趣旨を簡潔に述べる。本学の１学年の必修科目であるゼミナール１Ａの夏休みの課題に「おすすめの一冊」がある。読書を勧めること、相手に伝わる文章を書くことが目標であるが、クラスを担当しクラス代表を選出する過程で散見されたのは、原作を読まず映画を観て提出していると思われる内容、インターネットのあらすじサイトの引き写しといった事例である。この状況に憂慮しつつ、改めて学生たちにとっての読書の意味を問われることとなった。

講義では、短詩型文学（詩、短歌、俳句）や短編小説、評論を扱い、折りに触れて読書の醍醐味や重要性を説いている。その中で、この取り組みは映画化されたものの原作を読むこと、あるいは両者を比較することの面白さを知ってほしいという願いから取り入れた。「ミイラ取りがミイラになる」（逆に映画の視聴を勧めてしまう）危険性を孕んでいることは承知の

上の取り組みだが、今後の課題を探るためにも実践経過を報告する。

若い人たち（学生を含む）は話題になった映像作品については様々な媒体を利用して鑑賞しているようではある。（倍速にして観るという風潮には驚かされるが）しかし、その原作を読むことは少ないのではなかろうか。原作は読んだことがないという学生の声をよく聞く。もちろん、一般的には映像作品から原作の小説を読むという現象もあるようだ。

小説の映画化は、文芸作品の文芸映画化が主流であった時代とは様相を異にしている。かつては原作本の出版と映画化の時期が近接しておらず、私自身も、原作を読了後それがどのように映画化されているのかという興味・関心で映画を観た。しかし、残念ながら、多くの場合映画に違和感を持ち失望に終わった。もちろん、優れた映画化もあることは承知しており、視聴する順序も関係すると思われる。現代はメディアミックスというのか、原作の映画化は小説のみならずマンガ、コミックも加わり活況を呈している。

懐かしい思い出だが、かつて高等学校で現代国語を教えていた時、森鴎外「舞姫」を授業で取り上げたことがあった。ご存じの通り「舞姫」は「現代文」と言い難い文章（擬古文）で綴られており、四苦八苦しながらも授業を終えて、最後に映画『舞姫』（1989年度作品　監督 篠田正浩）を鑑賞した。主人公太田豊太郎を郷ひろみが演じたものだが、ヒロインのエリスが登場した時の生徒たちの反応が面白かった。生徒たちの多くが「イメージが違う」と配役（エリス役の女優）に対する違和感を表明したのだ。この現象を説明すれば、彼らは難解な原文から「エリス」像を自分なりに造形していたわけだ。つまり文字表現から映像イメージとして人物像を形象していたことになる。（蛇足ながら、郷ひろみ演ずる主人公に対しては、概ね肯定的であったことも付け加えておく。理由は「許せる範囲」ということらしい）

自身の経験を述べたが、一般的に映画に対する違和感や失望の原因として、場面のカットや大幅な改変、解釈の違いなどあげられるが、登場人物のイメージの違いというのも大きいのではなかろうか。

コロナ禍で当該科目もオンライン講義が続いたが、ようやく昨年度（2021年度）の後期から対面授業が可能となり、細部を修正しながらおこなっている。本年度前期は部分の修正に加え新しい試みを加えた。昨年度までは、この取り組みは題材として『何者』（浅井リョウ）のみであったが、今年度は、『夢十夜』「第六夜」（夏目漱石）、「ドライブ・マイ・カー」（村上春樹）の後半部分を取り入れた。

作品選定の理由と基準は、原作と映画の差異である。かなり原作に忠実に映画化されたとしても、映画は通常2時間程度という尺があり、原作はカットされる部分が多い。これについては映画『ドライブ・マイ・カー』は2時間59分という長尺であったこと、また、原作（複数の短編）から映画への大胆な改変があったことに驚かされた。また幾つかの賞（2021カンヌ国際映画祭　脚本賞、2022アカデミー国際長編映画賞など）を受賞し話題性もあったことで取り上げることにした。

『夢十夜』「第六夜」は「第一夜」と共に高校教科書に掲載されていることとテーマ（主題）の象徴性を捉えさせることが映画との比較において有効であることである。また、『何者』は内容が就職活動と題材として身近であることと長編小説の映画化の例として取りあげた。原作の主題は踏襲しながらもいくつか異なる点があること、また映像作品としてのこだわりもみられると考えたからである。

2、『夢十夜』「第六夜」（夏目漱石）と『ユメ十夜』「第六夜」（監督　松尾スズキ）

『夢十夜』「第六夜」は「第一夜」と共に高校教材（三省堂　国語総合　現代文編　2021年3月）に掲載されている。また、映画『ユメ十夜』の「第六夜」（2006年　監督　松尾スズキ　出演　阿部サダヲ、TOZAWA、石原良純他）は原作の主題は維持しながら、表現方法が斬新で大学生にとっても興味深いと考えた。「第六夜」は、設定は明治時代であるが、そこへ運慶（鎌倉時代の仏師　東大寺仁王門の金剛力士像などの作成で有名）が登場し仁王像を彫りだすという話である。

『夢十夜』「第六夜」（夏目漱石）について、三好行雄は「自然との一体化を喪失した明治文化への絶望と批判を語る」[1]とされるように、運慶が彫り出した仁王像には日本的なものが内在しているが、「明治」にはいまだに形象するに足る時代の精神を内在していない。西欧化や性急な文明開化の中で失われた「日本的なもの」を描き、漱石の文明批評につながる作品とされている。

本文「ついに明治の木にはとうてい仁王は埋まっていないものだと悟った」「それで運慶が今日まで生きている理由もほぼわかった」は、急速に欧化政策を進める明治に日本的なものが失われていくことを示しており、漱石の明治の鹿鳴館に代表される文化施策への批判とされている。

小説の登場人物たちの言動は明治の人々の浮薄さを形象していると考えられる。また、運慶は、仏師として有名であり「内在しているものを形象化する」人物として最適であろう。原作には「こんな夢をみた」の冒頭文がないが、映画版では男性（役者か？）の夢として描かれているため、文明批判を含みながらも個人の内面の問題により焦点をあてようとしていると考えられる。また、映画においても、原作と同様に見物する観客たちの浮薄さは描かれている。

映画は白黒画面であるが、ミュージックビデオ風に、運慶らしき風貌で斬新な衣装の男が何ともファンキーなダンス・パフォーマンスを見せ、圧倒的な表現力と自信に満ちた姿で仁王を彫りだす。エンターテイメント要素がたっぷりであり、観客たちも「萌え」など今風の言葉で大げさに声を挙げるが、全員が一様な反応で、いわゆる付和雷同的だといえる。登場人物（視点人物）の「私」が最後に自宅に戻り、自分も運慶のように仏像を彫りだすことが出来るのではないかと試みるが、結局「仁王」ならぬ「鮭をくわえた熊」が出てくる。これについて数人の学生が疑問として挙げている。北海道の民芸土産品として有名な「鮭をくわえた熊」が彫り出された理由については、明確には論じられていない。「鮭をくわえた熊」の民芸品は土産物として有名であり、確かに精巧に作られている。しかし「仁王」が芸術（宗教的要素も含む）的な作品であるのに対し、「鮭をくわえた熊」は規格品で数多く商品として流通する民芸品である。民芸品の芸術的価値を否定するものではないが、「仁王」の唯一無二の存在感と、商品として流通するものの違いは明らかであろう。

映画では最後に役者らしき男性（俳優　石原良純）が演じる男の夢として描かれている。楽屋もしくは控室でのうたた寝から目覚め、スタッフの「出番です」の言葉に否定的に反応

1）三好行雄『文鳥・夢十夜』（新潮文庫　1976.3）文庫本の解説より。

する「表現すべき」内面がない役者の苦悩が示されている。

授業としては、原作全文を読み主題及び表現について考えさせ、その後に『ユメ十夜』「第六夜」を鑑賞、感想と比較（共通点と相違点）を述べさせた。その後、学生意見をフィードバックしながら双方の解説を行った。

「第六夜」の学生意見・感想（原則として表現・表記は変えていない）

1　「夢十夜」第6夜の小説と映画の共通点は運慶ではないと仁王像を木の中から掘り出すことはできないという点と「運慶が今日まで生きている理由がわかった」という点が共通しているなと思いました。違った点は映画は運慶が仁王像を掘る際にとても派手なパフォーマンスをしながら仁王像を掘り出している点や映画の最後にでてきた人が運慶を掘り出そうとして掘り出したものが鮭を咥えた熊の彫刻がでてきたりしていた点です。小説だとあまり想像がつきにくいですが、今回見た映画は小説の内容が面白くまとめられていて、特に運慶が仁王像の顔を掘るときのダンスがシーンも長かったのでとても印象にのこりました。

2　夢十夜をまず、読んでみたところ木から仁王が出てくると言うことが、私の中ではあまりはっきりわからなかった。いったいどういうことなのかと同じ文を何度も読み直した。一通り読んだところで映画の夢十夜を見て、木から仁王の意味を理解することができた。しかし、映画が予想以上に現代向けの内容に変わっていると思った。本文のかぎ括弧の台詞は映画でもそのままであったが、運慶が木を割るまでのパフォーマンスがいきなり現代といった感じで正直驚いた。ただ、そのような内容に変換してくれていることもあり、内容が面白く分かりやすく頭に入ってきた。以前まで学んでいた理解して物語を読むと内容や、印象が変わるとは別かもしれないが、映像で見ると固いイメージの夢十夜がとても緩い感じのイメージへと変わったことにより、自然と興味がわいた。

3、小説「ドライブ・マイ・カー」（村上春樹）と映画『ドライブ・マイ・カー』（監督　濱口竜介）

講義の第12回に村上春樹「ドライブ・マイ・カー」の原文、終結部分（文春文庫『女のいない男たち』2016年 p62～p70）を読み、説明資料に沿って解説した後、映画の後半部を鑑賞した。以下に、講義内で資料とともに解説した点を示す。

映画『ドライブ・マイ・カー』（村上春樹原作　監督　濱口竜介　脚本　濱口竜介・大江崇充）

以下が小説のあらすじであり、カッコ内が小説とは異なる映画での設定である。

主人公の家福悠介は舞台俳優（映画：俳優・演出家）だが、妻、音を亡くした「喪失」

から回復できずにいる。音は複数の男性と関係を持っていたが、家福はそれを問いただすことができなかった。また、家福と音はかつて娘を生後数日で亡くしていた。（映画：4歳）その後、音は子宮がんで亡くなる。（映画：話があると音が言った夜に家福はあえて遅く帰宅する。そこで倒れている音を発見、意識が戻らずクモ膜下出血で亡くなる）家福は妻と関係を持っていたと思われる高槻と友人関係をもつ。（映画：家福が演出・監督する広島国際芸術祭での多言語劇に高槻が応募して、主役ワーニャに選出される）広島で家福が専属ドライバーとして雇った渡利みさきによって家福は安らぎを見出す。（小説はここで終わる）

（以下は、映画で描かれているもの）

音との関係をほのめかした高槻は、舞台練習中に傷害致死罪で逮捕される。そのため、主役を家福が演じるか、公演を中止するかの決断を迫られ、家福は二日間の猶予を申し出る。そして、考える場所がほしいとみさきの故郷である北海道へ行くことを頼む。長いドライブを経て、北海道のみさきの実家（崩落している）の前に二人は立つ。その後、家福は多言語劇の舞台に立ち公演を成功させる。最後には、韓国での新しい生活をするみさきが描かれる。

このように授業では、小説と映画をより理解させるためにプリント資料を作成し、あらすじと原作と映画の異なる部分を解説した。また、狂言回しとして重要な役目を演じる高槻耕史についても以下のように説明を加えた。

高槻耕史　かつて人気のある若手俳優だったが、女性とのスキャンダルで失脚する。家福が監督・演出する広島国際演劇祭のオーデションに応募して、「ワーニャ伯父さん」の主役ワーニャ（家福がかつて演じていた役）に抜擢される。彼は家福の妻、音とかつて関係があったとにおわせる発言をする。また、多言語劇に出演している女優（エリーナ役）とも関係を持っている。

映画では、家福とバーで話した後の行動や、ホテルまでの車内の高槻の独白が意味するものが重要となる。高槻は自身のことを「空っぽ」と述べる危うい青年であるが、後半では写真週刊誌の記者への傷害致死事件で逮捕され、自己抑制ができない人間として描かれている。しかし、高槻が逮捕されたことで、家福が主役ワーニャを演じることとなり、結果としては家福の「再生」を助けることとなる。

また、映画の多言語劇についても簡単な説明を加えた。

多言語劇はアントン・チェーホフ作の戯曲『ワーニャ伯父さん』である。19世紀のロ

シア、ワーニャ（ソーニャの父の弟）は故郷の土地を守っていたが、元大学教授の義兄のセレブリャーコフが帰還して土地を売ろうとするなどの混乱が起きる。また、登場人物それぞれの複雑な恋愛感情が描かれている。ワーニャは、義兄の後妻の美しいエレーナに、ソーニャは医師アーストロフに、アーストロフはエレーナに魅かれているという報われない恋愛の物語でもある。

劇の後半で、ワーニャは、自ら置かれている立場に耐えきれず義兄セレブリャーコフに発砲する。理不尽な土地財産の相続問題や報われない恋愛問題で絶望にいる人々が描かれるが、最後にワーニャはソーニャにより癒しを得る。この戯曲は深い絶望と忍耐の物語であるが、覚醒、癒し、そして再生につながるものである。

映画の多言語劇でのソーニャは渡利みさきと重ねられる。劇中でワーニャを家福が演じ、ソーニャがみさきと重ねられることで、家福とみさき、両者の相互関係による喪失からの再生の物語となる。それに対して、小説「ドライブ・マイ・カー」はドライバーのみさきとの会話、あるいは車という空間が家福を癒す物語となっている。映画では、多言語劇の練習場面で役者間に生まれる「何か」も描かれていたが、とりわけ舞台の最後のシーンでソーニャ（パク・ユリナ）がワーニャ（西島秀俊）に手話で語りかける場面が秀逸であった。

3つの短編小説「ドライブ・マイ・カー」「シェエラザード」「木野」が映画『ドライブ・マイ・カー』となり、原作にはない多言語劇がこの映画の可能性を広げたといえる。何よりも手話が雄弁な言語であることを示した。

また、原作「ドライブ・マイ・カー」（村上春樹）は癒しの空間としての車であったが、映画では車そのものとその移動、広島から北海道への長距離のドライブが静かながら圧倒的な映像の重ね合わせで、まさしくロード・ムービーとなった。コロナ感染状況の影響で撮影場所が変更され最終的には広島がロケ地となったことも、世界に向けての「ヒロシマ」を発信することとなり、とりわけ平和の軸線としての近代的なごみ処理場や家福が借りた家の周辺の美しい瀬戸内の風景も印象的であった。

繰り返すが、小説は主人公（家福）が専属ドライバーの渡利みさきによって癒しを得る物語であるが、映画は家福とみさきの相互の絶望からの再生という関係性が描かれていることが大きな違いである。

講義では小説の読み方として、第4回講義で例をあげて物語構造のA型、B型[2)]を説明している。

「かぐや姫」型とよばれるA型は、異界からやってきた存在が人々に影響を与え去って行く型で、『ET』が代表例である。「浦島型」と呼ばれるB型は、人間が主人公で空間移動を伴う変容（成長）物語であり、ミヒャエル・エンデの『はてしない物語』、映画『千と千尋の神隠し』など宮崎駿のジブリ作品に多く見られる。

「ドライブ・マイ・カー」（村上春樹）については、原作・映画は共に物語構造B型（空間

2）ウラジミール・プロップ、ロラン・バルトの昔話分析や語りの分析により、物語構造（物語の型）として提唱されたもの。かぐや姫型、浦島太郎型、その他2型もある。授業では2つの型について具体例をあげて説明している。

移動を伴う登場人物の変容の物語）であるが、原作では異空間はサーブの車が主であるのに対して、映画では車とともに移動（広島～北海道の往復）である。映像では多くのトンネルを抜け青函フェリーも含めて、空間の移動を表現している。

映画と原作（3つの短編）との関係では、主として短編「シェエラザード」からは、家福と妻、音との夫婦の在り方を、短編「木野」からは妻に裏切られる男の孤独の部分が採られている。映画でも重要なせりふとなる家福の「正しく傷つくべきだった」は短編「木野」にある表現である。

その他、いくつかの設定が異なる。家福と音との亡くした娘（小説：生後数日で亡くなる・映画：4歳）や、音の死因（小説：子宮がんで闘病期間在り・映画：クモ膜下出血）、車（小説：黄色のサーブ・映画：赤色のサーブ）などがある。車の選定については、赤が映像としての美しさから選ばれ、また車内でカセットを聞くという条件を満たす車が選ばれたそうである。妻の死因は、家福の自責の念を強くする効果、子どもについても親の悔恨の念や喪失感を強くさせていると思われるが、みさきの年齢と亡くした娘、みさきの父と家福を同年齢にしていることも見逃せない。

映画では家福は多言語劇の舞台を演じ切ることで再生し、みさきは心の傷（自宅が倒壊した時に母を見殺しにしたという自責の念）からの再生と希望が描かれる。先に述べたように同年齢という設定から、疑似家族、いわば新たな家族関係をほのめかせていると考えられる。つまり、映画は「みさき」の新たな父、「家福」の亡くした娘との邂逅と旅立ちの物語である。

映画のラストシーンは、みさきの韓国での新たな生活が描かれているが、車（家福と同じ赤色のサーブ）や同乗させている犬（演劇に関わった韓国人夫妻が飼っていた）は視聴者の様々な想像をかきたてる。

また、映画の効果的な演出は、車で流れる家福の妻、音のカセットテープの「声」である。それ以外にも、店で流れるレコードの音が無音状態であったり、北海道のみさきの家の跡のシーンでは、静寂な映像で車が映しだされる。これらについても様々な解釈はあろうが、無音のシーンが「音」の不在を示しているとすれば、愛する者の「不在」を受け入れ「再生」に向かう姿といえる。

すでに指摘されている[3)]が、映画では並列の関係が印象的である。車での位置（ドライバーと助手席）は当然であるが、映画の象徴的なシーン（車のルーフから二人がタバコを並べて差し上げる）も並列である。

その他にも細かな演出として、家福の眼は緑内障の兆候がありそれが専属ドライバーを雇うことになるのだが、右目の隅がブラインドスポットとなると説明されている。多言語劇のラストでワーニャ役の家福の右側の後ろからソーニャが手話で語りかけるのも欠落を癒す場面としての演出であろう。映画の成功要因の一つといわれる多言語劇は、あまりなじみの

3）映画『ドライブ・マイ・カー』については、雑誌、あるいはインターネット上で様々な論議、解釈がされている。「並行性」の指摘についてもその一つであり、印象的なシーンとして美学者の伊藤亜紗が言及している。また、「文喫　六本木」（2021.8.16）で濱口監督と映画研究家北村匡平とのトークセッションで伊藤亜紗は「人間関係というより『存在関係』を描いている」と述べている。
https://note.com/bittersend/n/nfaf2a28122dd（閲覧日 2022年9月15日）

ないものかもしれないが、言語間（手話も含む）の壁を超えるコミュニケーションのあり方が改めて問いなおされた。なによりも手話の雄弁さに驚嘆させられた。

紙幅の都合で多くは述べないが、登場人物の命名も興味深い。家福の妻、音については「音」（声）としての存在である。珍しいと思われる家福の姓は、諺の「禍福はあざなえる縄のごとし」から取られたのか、もしくはカフカ[4]のもじりかと連想されるが定かではない。言葉遊びのレベルになるかもしれないが、渡利みさきは、渡るという移動を連想させドライバーのイメージとなる。ひらがなの「みさき」は様々なイメージを内包しうるとのみ記しておこう。

映画評を紹介しておく。〈映画については「ドライブ・マイ・カー」を収めた、音楽でいう「コンセプトアルバム」（村上）たる『女のいない男たち』全体が本作の内部に反映されている。村上ワールドを保ちつつ、さらに新たな素材を編み込んで、読ませる原作以上の観させる映画に昇華できたのはまさに脚色・脚本の圧倒的な力量にある〉[5]また、映画製作者と出演者の対談（wowow 初回放送日2022.7.23）では、脚本家の大江崇充が「村上春樹とは違う井戸を掘った濱口監督が、同じ水脈をあてた」と述べ印象的であった。対談では、様々な演出においても監督一人のアイディアだけではなく、脚本家からのものも多く取り入れられたと語られ、まさに映画が共同制作であることが実感できた。

宇佐美毅氏は自身の大学研究室 HP で「小説の映像化とはどのような行為なのか」という問いをかかげ、学生の研究動向について「同じタイトルであっても異なるジャンルの異なる作品である以上、内容に異なる部分があるのは当然である。それを単純に比べれば研究になるというわけではない。それでは、村上春樹の短編小説『ドライブ・マイ・カー』を濱口竜介監督が映画化するという行為には、どのような相互作用が生じているのか。結論を先に示すのなら、両者は「問い／答え」の関係となっている。村上春樹が小説の形で提示した「死と再生」という問いに対して、目に見える具体的な「再生」の形を示すことによって回答を与えたのが、濱口竜介監督の映画化作品なのである」と簡潔にまとめられている。[6]

「ドライブ・マイ・カー」の学生感想・意見

1　ドライブ・マイ・カーは、1度流し見で見たことがありましたが、改めて視聴して、やはり私も家福の愛車の中での時間が印象的でした。音を亡くした喪失感を抱えた家福とみさきとの出会いを通して家福とみさきが愛車で生まれ故郷である北海道へ訪れている間で母親を見殺しにしたというみさきの抱える心の傷のようなものがさらけ出され、家福とみさきの距離が縮まったと感じました。嫉妬や悲しみ、後悔など生きてる上でマイナスにとらえてしまうものがとても真っ直ぐ自分の中に入ってきて考えさせられました。

　相手の心は全て理解することはできないから、話せる時に話して歩み寄って信じること

4）フランツ・カフカ（1883.7.3～1924.6.3）作家。『変身』『審判』が有名。実存主義的と称され、20世紀を代表する小説家の一人。

5）藤岡寛己「映画『ドライブ・マイ・カー』短評―原作を超えた構想力」（『進歩と改革』844　2022.4）

6）宇佐美毅（中央大学　研究 opinion）
『ドライブ・マイ・カー』―小説の問い／映画の答え―
https://yab.yomiuri.co.jp/adv/chuo/opinion/20220310.php（閲覧日 2022年9月25日）

が大切だなと思いました。自分の苦手や過去から逃げずに前向きに向き合うことで相手にも向き合うことが出来、あたらしい良い方向に向かっていくと感じ、自分も前向きに頑張ろうと感じました。他の映画ではありそうでなかったり、あまり表現されることの無いシーンが多く、とても引き込まれる映画でした。また何年後かに見ると違った見方や考え方になるのかなと思いました。

2　私は村上春樹という人は、小説家で少し有名だということくらいで書かれた小説も読んだことがなく、全然知らなかったのですが、映画「ドライブ・マイ・カー」という村上春樹が原作の作品を見た感想は主人公である家福が演劇『ワーニャ叔父さん』の役であるワーニャと自分を重ねることで徐々に立ち直っていくというのが家福の人生の話と演劇『ワーニャ叔父さん』がリンクしているように書かれているようで映画１本で物語が２つあるような感じがしてとても面白いと感じました。また、作中のセリフで高槻が家福に向かって「どれだけ理解し合っているはずの相手であれ、どれだけ愛し合っている相手であれ、他人の心をそっくり覗き込むなんて、それはできない相談です。しかしそれが自分自身の心であれば、努力さえすれば、努力しただけしっかり覗き込むことができる」という言葉がすごく印象に残りました。なぜなら、この言葉は作中だけでなく現実の全ての人にも当てはまるようなことだと思ったからです。また、この作品のラストのシーンでみさきは韓国にいて、家福の愛車である赤い車を運転していたのがなぜか語られないまま終わるのもオシャレだと思いました。

４、小説『何者』（浅井リョウ）と映画『何者』（監督　三浦大輔）

３作目として小説『何者』（新潮文庫2015年　初版2012年新潮社）の全編を読み、その後映画『何者』（2016年公開　監督・脚本　三浦大輔　主演　佐藤健、有村架純、菅田将暉他）を鑑賞した。ここでは『何者』の詳しい内容紹介は省略するが、SNSの要素も取り入れながら、仲間で協力して就職活動を行う中で嫉妬などの揺れ動く心理が生々しく描かれている。受講生の感想からも、登場人物のいずれかに同化しながら興味深く読んだことがわかる。原作を必ず読むことを条件としたので、早い段階で予告をし、講義内でも何度も注意喚起をした。小説を読んでいなければ答えられない空欄の項目のプリントを使用して、講義内で小説のあらすじや自分の読みを確認させ、その後、教室で映画『何者』を鑑賞した。

次に学生の感想・意見を載せる。

『何者』①学生感想②原作と映画の比較③原作の映画化のメリット・デメリットについて

1　①私は、映画「何者」を視聴して、就職活動のリアルさを見ることができてとても面白かったです。映画は、どうしても日常を綺麗事に描きがちですが、この映画は、人間の泥臭い部分や生々しさがよく表現されていて、リアルさがあってとてもよかったと思いました。この作品のタイトルのように、登場人物みんな自分以外の「何者」になりたくて、自分を偽ってしまったり、見栄を張ったりしているのだなと思いました。しかし、表だけ良

くしていても、面接などではボロが出てしまうこともあると思います。そのため、難しいことだとは思いますが、かっこ悪い自分も認めてあげて自分に正直であることが1番大切なんだと思いました。また、就職活動をするにあたって、最初は「みんなで協力しよう」と言っていましたが、SNSでは人を見下したり、本音を漏らしたりしていて、就職活動は団体戦ではあるが、個人戦でもあるのだなと気付かされました。自分が就職活動をするときには、自分を綺麗に見せすぎずに、でも自分を偽らずに自分に正直でありたいと思いました。

②映画と小説を比較して、映画は小説に比べて場面の空気がどのようなものなのかよく分かりました。小説は、文字を読んでこの場面はどういう空気感なのかを自分で想像しますが、映画は役者の人が場面によって表情を変えているので、その場面が明るいのか、暗いのかがすぐに理解できました。しかし、小説のように自分で想像しながら読み取るのも面白いと思いました。

③原作を映画化するメリットは、原作の世界観を可視化して見ることができるところだと思います。小説は、自分で登場人物の人物像やその場の空気を想像しますが、映像化することで、見る人に簡単にその物語を伝えることができると思います。また、原作を沢山の人に知ってもらえるという利点があると思います。人によっては、本を読むのが苦手だという人もいると思いますが、映画を見て内容を知ることで、本を読んでみようと思う人も増えると思います。

一方、デメリットは、映像化となるとどうしても原作通りにいかないという点があると思います。映像は、約200～300ページもある小説を2時間ほどで簡潔に表現しなければいけません。そうなると、どうしても原作と登場人物の関係性や物語の内容が変わったりしてしまいます。また、原作ファンがいると、どうしても原作と映画を比較してしまう人がいるという点もあります。原作ファンの人が映画を見ると、どうしても物足りなく感じたり、伝えたいことはそんなことではないと感じる人も多いと思います。このように、小説を映像化するには、メリットとデメリットで様々な点があります。

現在、小説を映像化する際、どうしても意見が分かれることが多いと思います。しかし、これからは小説と映画、それぞれを見て、同じ作品だけれど違う見方で、どちらも良いと思ってもらえるようにしていくことが大切だと思いました。

2　①②私が特に印象に残っているシーンは最後の扉を開けて終わるシーンです。小説を読んだだけでは、バッドエンドかハッピーエンドかわかりませんでしたが、映画を見ると最後は少し暗い場所から扉を開けて明るい外に出て行くシーンで終わっていたので、私としてはハッピーエンドのように感じました。映画では扉を開けるシーンで終わっていましたが、小説では面接のシーンで終わっています。私は小説の終わり方よりも映画の終わり方が良いと感じました。映画は新しい世界への旅立ちのような終わり方だったので、これからの主人公の活躍を想像してしまいました。

③私は映画のメリットとして、より多くの人に知ってもらえることがあると思います。原作は知らなかったけど、好きな俳優が出ているから映画を見てみたということがよくあると思います。また、映画は一つ一つのシーンを想像する必要がなく、視覚的に理解する

ことができることも良いところだと思います。デメリットは原作を書いた作者の意図が伝わらないことがあるところだと思います。映画は時間が限られているため、原作で書かれていた表現が省略されてしまう場合があります。これにより、作者の言いたいことや伝えたいことが視聴者に伝わりにくくなってしまうと思います。また、映画の俳優の演技に依存してしまっていることもあると思います。原作のメリットは作者の伝えたいことや独特な表現が楽しめるというところだと思います。映画を作るのは監督であり、原作の作者が映画を作っているのではありません。そのため、原作では素晴らしいと思った表現が、映画では印象に残らないようなことがあるのだと思います。デメリットはイメージすることが難しい場合があることです。私は「何者」を読んでいると、言葉だけでは伝わりにくいと感じる場面がありました。このことから、映画の方が場面をイメージしやすいと感じました。私は映画と原作は別物として楽しんだ方が良いと思います。映画にも原作にもそれぞれ良い部分と悪い部分があるため、映画と原作を比較してどちらが良いかを決めるのではなく、どちらも楽しむことが大切であると思います。

5、小説と映画の比較

講義では「映画になった小説」のまとめとして両者の比較やそれぞれのメリット・デメリットを確認した。以下は、受講生の意見をもとにして作成したプリントからの抜粋である。

Ⅰ　小説「何者」と映画「何者」を比べて

小説の方がよかったと思う点

・自分のペースで読める　・深くしっかり読める
・想像しながら読める　・細かい　・入り込める
・様々な解釈ができる　・何度も読み返すことができる
・最後の拓人のせりふがよい　・理香が拓人を責めるシーン
・主人公　二宮拓人の成長が結末に描かれている

映画の方がよかったと思う点

・俳優の演技（表情）で感情の起伏が理解できる
・飽きずに観られる（集中度　2時間）
・感情移入できる　・登場人物に同化
・SNS　演劇（舞台）の効果的な使用　（デジタル空間　　アナログ空間）
・演劇　拓人が舞台で拍手されている場面はSNSで承認されたいという心理
・演劇の場面　映像ならではの臨場感　・音楽　カメラのアングル　・適度な回想シーン
・主人公拓人（視点人物）の成長を暗示　・群像劇でもある　・問題提起されている

Ⅱ　表現媒体の違いからくる効果の違い

小説のよい点

・いつでもどこでも読める　　・比較的安価
・自由にイメージを作ることができる　　・感情移入できる　　・自己投影させやすい
・没入感 あり　　・受け止め方の自由度が保証される
・読み手の数だけ独自の作品となりうる　　・想像力のある人は小説を好む

小説の弱い点

・多量の文字情報　・難解な表現など読みに抵抗がある人がいる
・演出がないため、個人の想像力に委ねられる
・作者の描いたものと、読者の受け取り方の違い　・テーマ把握の幅
・個人が作成したもの（よい点でもある）

映画のよい点

・多くのスタッフによって作られた総合芸術　・監督・俳優・映像・音楽など相乗効果を生む
・映像・音楽による臨場感　・視聴者の集中度　飽きずに観られる（2時間程度）
・リアリティ　演出による工夫　バーチャルも含めた自由度あり
・エンタテインメントとして楽しめる
・原作から発展（監督・脚本による改変）の可能性
・話題性、問題を社会に問いかける力

映画の弱い点

・俳優の演技を通して理解することとなる　・思っていたキャストではない場合がある
・説明が俳優の表情でされているので、解釈が難しい場合もある
・映画の尺（90分～100分程度）という限界性　・カットされる部分が多い
・好きな場面がカットされる可能性がある。
・展開が早くなることが多い　・深さでは小説より浅い？
・映画製作者・俳優の解釈となり、観る人の想像が入る余地が少ない
・原作を知っている場合は、違和感のある部分もある
・実写化をする場合、特定の俳優にキャラクターを置きかえるため、先入観による違いで違和感が生じる場合がある
・商業化（莫大な資金）による問題と視聴者からの批評に影響を受ける

6、講義の振り返りと今後の課題

第15回の講義全体の振り返りで「映画になった小説」の取り組みについて述べている学生が多くいたので、一部紹介する。振り返りの課題は「講義で最も興味を持ったジャンルと講

義で学んだことを今後の文化的な生活にいかに活かすか」である。

講義の振り返り

1　僕はこの前期で「総合教養F」を受けてきて最も興味を持ったジャンルは「映画になった小説」です。今回は『夢十夜』の「第六夜」、村上春樹の「ドライブ・マイ・カー」、朝井リョウ『何者』の3つを見ました。この中で「ドライブ・マイ・カー」と『何者』が見てて面白かったです。「ドライブ・マイ・カー」に関しては内容が難しかったのですが授業での解説が少しあったので見やすくなりました。『何者』に関しては、今現在だったり、僕だったらもうあと1年後に実際に起こるかもしれない、起こる可能性がある内容であったので見やすかったです。「就職活動」というものなので、自分の一年後の状況を想像しながら見ることができたので、興味がとてもありました。また「SNS」を使っている内容なので、「SNS」のこわさや「SNS」がどんなに危ないかもなどといった内容も入っていたので、今現在に照らし合わせながら見るのもとても面白かったです。どちらに関しても内容はもちろんのことなんですが、キャストも本当にすごく有名な方達がたくさん出ているので本当に良かったです。

今後の文化的な生活では、この期間で学んだ多くのことを活かして、小説を読んだり、読み取りや作者の気持ちを考えながらしていくのも心掛けていきます。また、興味を持ったジャンルでもある「映画になった小説」も今回学んだものだけではなく、もっとたくさんのものがあると思うので、それも機会があれば見てみたいなと思いました。小説になった映画はよくあるパターンで見たことはあるので逆パターンはめったにないので見るようにしたいと思います。

2　この講義を受けてきて私は「映画になった小説」に最も興味を持ちました。「ドライブ・マイ・カー」や「何者」を講義の中で視聴して、小説と映画の共通点や違う点について学ぶことができたからです。

「ドライブ・マイ・カー」はカンヌ国際映画祭にもノミネートされた作品で、一度観てみたいと思っていた作品だったので全編ではありませんが観ることができて良かったです。「何者」では最後の面接のシーンで実際に自分が面接を受けている気持ちになり、小説では味わえない臨場感あふれるものを感じました。これからの生活で「映画になった小説」を読んだり映画を見たときは、小説と映画の共通点や違う点を見つけて、読んだり鑑賞したりしていきたいです。一番興味を持ったのは「映画になった小説」でしたが、俳句や短歌などもとても面白かったです。「おーいお茶」で俳句の募集をしているので積極的に応募しようと思います。

3　いままでこの講義を受けて最も興味を持ったジャンルは「映画になった小説」についてである。なぜこのジャンルに興味を持って取り組むことができたかというと、私は映画が好きで普段邦画、洋画問わずよく映画を見ることが多いが、小説が原作の映画は映画だけで終わってしまうことがほとんどで、原作の小説を読んだことはなかった。しかしこの講義を受け、小説の「夢十夜」と映画「ユメ十夜」や「ドライブ・マイ・カー」「何者」と

いった小説が原作の映画に触れて、小説と映画を見比べて、小説の良さや映画化して映像として見るメリットやデメリットに気づくことができた。普段全く小説を読まないが、この講義で小説「何者」を読み、映画と見比べてみて比較して分かる良さであったり、新たな発見や違いなどを見つけることができた。

今後は今まで見てきた原作が小説の映画をもう一度見返してその原作の小説に触れていくことで、文化的な生活に活かしていこうと感じることができた。

新しい取り組みであったが、3つの作品を取り上げることにより、小説から映像化への多様な方向性が確認できた。ここで、原作の映画化について述べている映画監督青山真治の文章を紹介する。[7)]

映画監督青山真治は自身が小説家でもあることで、「映画と小説の間に生まれる重層性」で小説の映画化について興味深い発言をしている。紙幅の関係もあり、興味深い箇所のみを引用する。

青山は「場所・地理の重要性」としてこのように述べている。

「中上健次の小説の舞台となった新宮へ行ってみるとわかりますが、中上が書いているような場所とはまったくちがう。もちろん彼はその場所を熟知しているのですが、それをそのまま書かず徹底的につくり直している。その本当か嘘かわからないところに、われわれは足を踏み込んで惑わされ続ける。それが小説を読んだり、映画を見たりすることの一番の喜びであり、楽しみではないでしょうか」と述べる。そして、「小説で描かれる風景や人物は、いわゆる“本物”ではない」として「その本物ではない部分とどう折り合いをつけるか」と述べられている。

また、ロケ地が大事であると同時に「俳優」の問題が大きいとする。「小説では作家の思いどおりにキャラクターを創造できるのに対して、映画ではそれを演じきれる役者がいないと成立しない」と述べ、さらに映画に向いている小説と向いていない小説があるとされている。「やはり小説は言葉のつらなりの美しさ。映画はもう絶対的に画の素晴らしさである」と述べ小説と映画の関係で「フィクションと現実との重なりみたいなものに興味がある」と述べている。

最後に今後の課題を述べる。本年度は話題性もあり小説「ドライブ・マイ・カー」の抜粋部分を読み、映画の一部（後半部分）を視聴した。受講生の反応としては話題作でもあり興味は持ってくれたようだが、テーマ把握の難しさに加えて、部分の視聴では理解に限界がある。この機会に興味を持って全編を視聴するということになればよいが、それに甘えることはできない。次年度の検討材料としたい。

夏目漱石『夢十夜』「第六夜」と朝井リョウ『何者』については、今後も継続することを考えている。「第六夜」は、授業時間の関係で本文の分析はそれほど細かくはできなかった。第4回～7回に小説の読み方として短編2編を取り上げているので、それに組み入れることも考えている。

朝井リョウ『何者』は、長編であるため事前に学生に読んでおくように伝えているが、す

7）青山真治「映画と小説の間に生まれる重層性」（『kotoba』（23）2016春　集英社）

べての学生に徹底することは難しい。授業では原作を読んでいなければ答えられない項目を空欄にした穴埋め問題を解く形で、原作の内容を確認した。さらには場面や登場人物について問うことで、原作の理解と主題把握をすすめた。小説のページを何度も繰りながら熱心に取り組む受講生の姿が見られた。学生の振り返りで「小説を読むのが苦手であったが、なんとか時間をかけて読めた」という声もいくつかあったので、趣旨である読書を勧めることについては一定の効果はあったのではなかろうか。『何者』では、主として登場人物像の分析とストーリーの把握、表現の特徴について考えさせた。小説の読み方の基本はすでに短編の分析で行っていたが、短編と長編の読み方の違いについても今後言及していきたい。

7、おわりに

総合教養の位置づけは、かつての一般教養科目（現在はリベラル・アーツと訳されることが多いが必ずしも同義ではない）である。本学は商業大学であり、専門科目を１年から学ぶという中で、この科目は必修でもなく、また就職試験に直接役に立つというものでもない。受講生の傾向として３，４回生が多く、就職試験に役立つと思っているのかもしれないので、ガイダンスでは「すぐに役立つものではない」と説明している。

講義では数多くの作品（俳句・短歌・詩・小説・評論・映画）を提示することで、それなりに楽しみながら学んでいたように思う。しかし、授業を離れた時、果たしてどれぐらいの学生が自ら書物を手にするだろうか。読書によって、様々な知識を自主的に獲得し、自分の考えを持ち、それを広げたり深めたり確かなものにするという意識は残念ながら低いようである。現在は情報については比較的簡単な方法で手に入れることができる、しかし、得た情報についてリテラシーを持ち、批評的に読むことで自分の思考を確かなものにすることが重要であり、書物がそれを補完・補強してくれる。

最初に述べたが、１年生の夏休みの課題「おすすめの一冊」について懸念されるように、たとえ長い休暇であっても一冊の本を読むことは難しいようである。講義でも繰り返し「読書」の意義とその面白さは述べたが、どれぐらい伝わっているのだろうか。活字離れをくいとめる術はあるのだろうか、と憂いながらも、ささやかなこの取り組みを通して、本を手に取って読んでくれる学生が一人でも増えることを願うばかりである。